

わからないから始める 発達障がい者と 関係調整のヒント

「言っても聞かない」「何度説明しても伝わらない」といった
現場の困りごとを、障がい特性だけで説明するのではなく、
支援者と当事者の間にある規範や前提のズレとして捉え直します。
そのズレをどのように理解し、関係調整へつなげていくのかを、
事例を通して検討します。



就労担当者の方へ おすすめ！

企業の就労担当者、
就労移行・就労継続支援
事業所の職員、支援機関
の方など



オンラインセミナー (ライブ配信)

見逃し配信は
ありません



参加費 無料



支援・教育・福祉・ 対人援助に携わる方へ

理解の方法論を、
事例を通して
一緒に考えます

全6回プログラム (各回45分)

各回：①事例提示→②ポイント解説→③クロストーク

1



8月20日 (木) 13:00~13:45

ふさわしいコストを払うこと

職場で就労終了後に食事をする従業員の事例を通して、
人を理解するためには時間や手間、思考の負荷といった「コスト」が
必要であることを考えます。

2



8月20日 (木) 14:00~14:45

不思議に思うことを厭わないこと

商談中に担当者とクライアントの間へ入り込み説明を始めた従業員の事例を扱い、
「空気が読めない」という説明にせず、その人の見ている世界を理解しようと
する姿勢について考えます。

3



8月20日 (木) 15:00~15:45

その人の理由を汲むこと

職場で紙袋を机の脇に置き続けた従業員の事例を扱います。
対話を通して、行動の背景にある本人の理由が見えてくる過程を描きます。
※本事例は2026年日本自閉スペクトラム症学会で発表予定です

4



8月21日 (金) 13:00~13:45

自分の定義を崩すこと

「やる気がある」「反省している」「協力的である」「普通に働く」など、
私たちが当然のように用いている言葉や価値観を問い直します。
規範のズレをどう理解するのかを検討します。

5



8月21日 (金) 14:00~14:45

その人との間に新しい言葉を生み出すこと

理解とは、一方が他方を正しく理解することではありません。
異なる前提を持つ両者が対話の中で、新しい意味や共通理解が
生まれていく過程を、事例を通して考えます。

6



8月21日 (金) 15:00~15:45

その人と周辺者をつなぐ通訳者になること

支援者の役割は本人を理解することだけではなく、
本人の思いや価値観を周囲へ伝え、関係を調整していくことの大切さを、
これまでの5つの視点を振り返りながら総括します。

クロストークでは、研究者・教育者・支援者としての立場から事例を検討しながら、考え方や実践に
向けた理解を分かりやすく提示します。本企画は障がい者雇用や関わりごとの対話を入りとしながらも、
支援、教育、福祉、対人援助、組織マネジメントなどに共通する「理解の方法論」を扱います。

開催日時

2026年 8月 20日 (木)

13:00 ~ 15:45

2026年 8月 21日 (金)

13:00 ~ 15:45

対象

就労担当者の方を中心に、
福祉・教育・医療など対人援助に携わる方

参加費

無料

形式

オンライン (ライブ配信)

※見逃し配信の予定はありません

こんな方におすすめです

- ✓ 就労支援・人事・社内支援担当者の方
- ✓ 障がい者雇用の現場でお悩みの方
- ✓ 支援のあり方に行き詰まりを感じている方
- ✓ よりよい関係づくりのヒントを探している方

来春、書籍化を見通しています

本セミナーの内容は、来春の書籍化を見通して
構成しています。オンラインでの学びを、より
深く、より広く活用いただける形で
まとめていく予定です。



講師紹介

大内 雅登 (おおうち・まさと)

一般社団法人みんなの大学支援センター、Care Media Labo 主任研究員、
一般社団法人発達支援研究所客員研究員、LD専門オンライン家庭教師S&D 代表講師。
児童発達支援、放課後等デイサービスの職員として実践を重ねる中で、当事者視点と
対話的理解を軸に、支援実践と研究を推進する活動を開始してきた。現在は、就労継続
支援B型事業所の職員として、学齢期に照らさない障がい当事者との関わりを持っている。
編著書『自閉症を語りなおす 当事者・支援者・研究者の対話』(新報社)では、
ASD理解の前提そのものを問い直す試みを行った。共著論文「眼・解から調整・
共生へー対話的理解実践に向けた自閉症をめぐる理論的研究」(知的発達学研究会)
では、ASD当事者と支援者の相互理解を、特性的な理解や解釈にとどまらない対話的
調整に基づく支援理解の枠組みとして提示している。さらに、ASD当事者が関与した
重大事件における被告人供述分析に取り組み、2026年に弁護士へ提出した。こうした
支援実践と研究、対話の積み重ねを通して、支援の現場における当事者視点の位置づけ
を問い続けている。

対話者紹介

引地 達也 (ひきち・たつや)

文部科学省障害者の生涯学習推進アドバイザー、フェリス学院大学
グローバル教養学部心理コミュニケーション学科准教授、一般社団法人
みんなの大学支援センター
1971年、仙台市生まれ。上智大学大学院文学研究科新聞学修士後期課程修了。
博士(新聞学)。毎日新聞記者を経てドイツ留学。帰国後は、経営情報誌
の編集者を経て、共同通訳者入社。外務部、韓国・延世大に社会実学し、
ソウル特派員。退社後はメルボルンでオーストラリアの機関誌を研究し、
帰国後、大手金融機関の経営コンサルタント、外務省の公益法人理事兼
事務局長など国際経験を生かした業務に従事。東日本大震災でのボラン
ティア活動「小さな避難所と復興をまわらるボランティア」をきっかけに、
支援が必要な場所への活動を開始。2020年4月、一般社団法人みんなの
大学支援センターを設立し「ウェブでつながる」を基本とした要支援者のための学びの
場を開発。著書に「ケアメディア論」(ラゲーナ出版)、「わたしたちのケア
メディア」(湯文社)等。



お申し込み方法

右記QRコードからお申し込みください。
お申し込み後、視聴URLをメールにてお送りします。



主催：Care-Media Labo